なぜ原発被災地において土地の働きかけは行われるのか

-生産活動を行えない人びとの恥の意識を通して-

東北学院大学大学院　人間情報学研究科　人間情報学専攻　博士後期課程　庄司貴俊

1　目的

本報告では，原発被災地でみられる農家の活動から，生産性のない土地に対しても執拗に働きかけが継続される理屈を明らかにする. 2011 年に福島県で発生した原発事故とその後の国の施策は，多くの住民から故郷や生業を奪うことになった．本報告が対象とする集落も，事故による影響と国の施策により，多くの方が居住地域を離れ，かつ集落の農家は一様に農業から身を引かざるをえなくなった．このように集落の農家は生産活動をやめざるをえなくなったが，一方で生産性を失った土地でも耕作放棄地としないように，土地への働きかけに関しては継続して行っている．生産活動から身を引いた農家にとって，土地を保全し続ける意義がないことにくわえ，定期的に避難区域へ立ち入ったり，除染されていない土地と関わったりすれば，放射能にさらされる機会が増え，被ばくによる健康被害を起こす可能性を自ら高めているようにみえる．では，なぜ集落の農家は土地への働きかけを続けるのだろうか．以上の問題について本報告では考察を行う.

2　研究方法

集落でフィールドワークを行い，人びとへの聴き取りで得た知見をもとに，震災以前の働きかけの様相，および土地へ働きかけなかった場合に生じる事態を軸に考察を試みる.

3　結果

生産活動から身を引いた理由については誰からも望まれないから，売れても安いからなどさまざま挙げられた．一方で，手入れをやめる理由については体調を崩すなど手入れができない状況を指していた．震災以前の働きかけは道路沿いなどの土地には力を入れて行い，裏山などの土地は後回しにされていた．震災後の働きかけもそれに従って行われている．ここには複数の理由が関係している. 1 つ目は 10 年以上前に端を発した産廃問題で対立した人びとの言動を抑えるため, 2 つ目は集落の人びとの言葉を借りれば土地を他者にいじられないため，3 つ目は仮に他者がいじってきたとしても土地の状態を根拠に対抗するため, 4 つ目は他者から笑われないためである．以上の理由は「昔から生産のための手入れと荒らさないための手入れは違う」という人びとの語りでも表現されている.

4　考察

以上から，私が私で在り続ける「所有権」，その所有関係に脅威が及んだ際に対抗する「発言権」，産廃問題で対立した人びとを抑制する「主導権」，これらすべてが土地への働きかけに根拠をおいていることがわかる．では，根拠として働く土地への働きかけは何によってもたらされているのだろうか．おそらく，それは 4 つ目の理由にある「恥の意識」であると考えられる．これは道路沿いといった人目に触れやすい土地から裏山といった人目に触れにくい土地に向かうにつれて働きかけの濃淡が薄れていくことからもわかるだろう．いわば，荒らさないための手入れとは，他者の存在を前提においた行為なのである．その重要度は生産活動をやめる理由に比べ，手入れをやめる理由のハードルが高いことからも伺える．すなわち，人びとが行う土地への働きかけは単なる生産的意味合いでの労働ではなく，社会関係のなかに埋め込まれた労働なのである.